

---

# 英雄を導く無限の空

合歡の木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄を導く無限の空

### 【Nコード】

N3409Y

### 【作者名】

合歡の木

### 【あらすじ】

魔法の天才でありながら、劣等生として過ごしていたナギ・スプリングフィールドは魔法学校を中退し、旅にでることにした。別の世界では一人でのスタートだったがここでは違う。隣にはこいつがいる。無限の可能性を秘める二人は、どんな道を、空をいくか。

## Prologue 二人のある日（前書き）

処女作であります。未熟者ですが、「作者よし、読者よし、世間よし」の精神で参りたいと思います。

## Prologue 二人のある日

ここはウェールズ、

ドドドドドドドド！

イギリスの山奥の、自然にあふれた平和な村。

ドパパパパパ！

ここには常識として、この世界には存在していないとされている魔法使い達が住んでいた。

ドカツ！ ドドガカツ！

そして今その平和な村の片隅で幻 郷の妖怪達のごっこ遊びもかくやと思われるほどの弾幕戦が繰り広げられていた。

「今回は俺が勝つぜ、マキナ！今日はとびきり調子がいいんだ！魔法の射手 連弾・光の41矢！！！」

「む、なんの！魔法の射手 連弾・水の41矢！！！」

光弾と水弾がぶつかりあい、打ち消しあっている、その余波が地形を変えていく。

その弾幕戦の中心にいるのはあざやかな赤い髪の少年と、蒼い髪にこれまた蒼い瞳の少女。

「生憎、こつちも調子がいいよ！『連弾・砂の13矢！！！！』！」

「おわっ、今度は砂か！いいいしょ！」

砂弾が少年を襲うが高く跳び上がることで回避した。

「ナギ！もうすぐ5時になっちゃうからここで決めさせてもらうよ！『フォルテース・フォルトーナ・ユウエアト、来れ地の精、花の精、夢誘う花纏いて蒼空の下、駆け抜けよ、一陣の風《春の嵐》』  
！！」

少年は少女がこの勝負を終わらせようとしていることに少し寂しさを覚えたが、力比べは彼の好物なのだ。

「おっしゃ、いくぜ！『マンマンテロテロ、来れ雷精風の精、風を纏いて吹きすさべ南洋の風《雷の暴風》』！」

ドン！！！

先程までの比にならない威力のぶつかりあい、そして両者の顔に浮かぶのは心からの笑み。  
しかし、そこでいき場をなくした巨大な力の奔流は臨界を超え、

ドーーーーン！！！！

「わーーーー」

二人を吹っ飛ばした。

~~~~~

「いたたた、今日は引き分けかな？ナギ？」

「そのようだな、えーとこれで俺の6勝4敗7引き分けだったかな？」 「む、違うよ！わたし勝ったの6回だよ。ナギのほうが負けてたよ！」

「なに！俺のほうが勝ってたろ！」 「あ

り得ないよ、だいたいナギはこの前の算数のテスト20点だったじゃん！100点だった私のほうが正しいよ！」

「ぬあ！それを言うな！くすぐってやる、この！」

言うが早い、ナギはマキナにとびかかって、そのままくすぐりにかかった。

「キヤ！あははは！あは！にやははっ！この！お返しだ！ここか！ここがええのんか！」

「なんだそれ！あははは！やめろ！」

その後はもうもみくちゃだった。さっきまで弾ごっこを繰り広げていた二人とは思えないような原始的かつ平和的なやり取りだった。

しかし、そこで一つ何か起こすのがナギだった。マキナの髪に鼻をくすぐられ、対女性凶悪兵器たる《武装解除》発射態勢にはいったのだ。

「えっ！ちよちよとナギ！」

しかも強く抱き着いている上に真正面だった。

「ぶえつくしよん！」

そして予想通り、マキナの服の上半身は瞬時に吹っ飛んだのだった。

「キャーーーーー!!」

しかし、そこで新たに闖入者が現れた。

「こるるあゝゝゝ! 騒がしいと思ったら、やっぱりお前からかゝ! ナギ! マキ ナ」

ウェールズの雷おじさんこと、スタンさんであった。そして彼がそこで何を見たかというと、

上半身を剥かれてもがいてるマキナに抱き着くナギ。

「スタンさん、これh「ナギ」

気温が十度低下したように感じた。

「お前は物心ついたときから悪戯魔法三昧、皆に迷惑をかけてきたな。しかし、まだ十にもならんうちにそのような犯罪に手を染めるとは」

「いやだから誤k「せめてお前にさんざん迷惑かけさせられたこのわしが引導を渡さなければならんじゃろっ」

自然とマキナを拘束する腕が緩んだ。自由になった彼女は胸を手で隠しながらできるだけ遠くへ逃げようと一目散に駆け出した。とにかく遠くへ、という一心だった。

そして彼女がナギの断末魔のようなものを聴いて見たものは、スタンさんの拳を受けて夕暮れの赤い空を飛翔するナギだった。

これは後に「千の呪文の男」と呼ばれたナギ・スプリングフィールドと、「無限の蒼空の姫」と呼ばれたマキナ・リリエフォールの旅立ちの前の日常の一コマである。



## P r o l o g u e    二人のある日（後書き）

いきなり弱音吐きますが、早速「読者よし」でいれるか不安になつてきました。面白い台詞を考えられたらなあと思います。あと表現力がほしいなあ。

## 二人の資料（前書き）

設定です。ていうか二人の成績h y「見るな~~~~~！」ドカツ！

ナ、ナギ、君一体どこから ガクッ

「いいか、見るなよ！お前ら絶対見るなよ！」

「ナギ、それじゃ絶対見ろって言っているようなものだよ」

「えっ、なんでだよ、マキナ！？」

「日本ではそれをお約束っていうんだよ」

「？」

## 二人の資料

メルディアナ魔法学校  
1978年度第三学年  
総合成績表より抜粋  
十段階評価

No.6

マキナ・リリエフォルス

母国語 10

ラテン語 10

古代ギリシア語 10

算数 10

社会（新、旧世界総合）

10

調合（知識、実技総合）

10

体育 9

魔法知識 10  
魔法実技

10

魔力量 A+判定

適性 水 氷 地 雷

備考

飛び級及びMM高等魔法学院特待生候補

No. 7

ナギ・スプリングフィールド

母国語

4

ラテン語

3

古代ギリシア語

2

算数

2

社会（新、旧世界総合）

3

調合（知識、実技総合）

4

体育

7

魔法知識

4

魔法実技

7

魔力量

A+判定

適性 風 光 雷

## 二人の資料（後書き）

あれっ、て思った箇所もあったと思いますが、その理由は後の話にて。

## **P r o l o g u e S E C O N D    憂いの教師と雷おじさん（前書き）**

長くなつてしまいました。あと、前半読み辛いです。

今回、戦闘シーンはありませんでしたが、オリジナル魔法がでてきたのであとがきに説明載つけました。拙作ですが、どうぞお楽しみください。

## Prologue SECOND 憂いの教師と雷おじさん

とある教師SIDE

ドパパパパパパ！

遠くから聞こえてくる何かがぶつかりあい、破裂しているような音を耳にして、その教師 もといナギがいるメルディアナ魔法学校の第四学年主任は今日何回ともしれないため息をついた。

――また何かを起こしているのか、あの子らは 。  
思えば三年前の入学式、あれがすべての始まりだった。

当時まだ五歳だったあの子らは十五名の入学者のなかで一際目を引く存在だった。

ナギは女の子と見間違えるほどの繊細で愛くるしい顔をニコツと皆に向け、元気を振り撒いていたし、マキナはナギと対照的におとなしくしていたが、いまでこそあのような快活な子になったが、そのときは五歳児らしからぬ張り詰めた雰囲気とその巨大な魔力をただ漏れにしていたおかげで彼女の周りにはそだけ陥没しているかのようには人は寄り付かず、また、固く閉ざされた彼女の唇がより圧力を強くしていた。

彼女自身は最上級の人形造りの最高傑作にもひけをとらないであろう容姿をもっているのにもかかわらず。

しかし、そんな中、マキナに近づく者がいた。

――ナギである。

彼は最初からのべつくまなく声をかけていたが、自分と同じ異常な魔力量を感じたからなのか、このときはワクワクした顔だった。

「ねえ、君名前はなんていうの？」

「　　！　　キナ」

「え？」

「マキナ、マキナ・リリエフォルス」

「そっかあ、いい名前だな！」

「ありがとう。　　あなたの名前は？」

「俺か！俺はナギ・スプリングフィールド！最強の魔法使いになるんだ！」

「　　最強の？」

「うん！」

「　　フツ」

彼女は鼻で笑った。

「なっ、なんで笑うんだよこのやろー！むきーー！」

当然、ナギは怒った。そしてとびかった。

「　　やめなさい。このクソガキ。」

「うがーー！」

どっちも年齢的にガキであった。



そしてそのまま倒れた二人はマウントポジションの取り合いを始めた。

「くらゝ！やめなさい！」

が先生の横槍が入った。

が！

「うるさい！」

「邪魔」

「あべしっ！！」

魔力の籠ったパンチとキックが二人から炸裂した。

成人たる教師が五歳児のパンチとキックで飛んでいく、さぞかしシユールな光景だっただろう。

そう、何を隠そう、そのときかつ飛ばされた先生というのは、この私である。ほかの先生達はこの後、私を除いた総出で二人を取り押さえ、入学式のあと、1時間にわたって説教をしたそうだ。なぜかマキナは笑みを浮かべていて、彼女のご両親からはとても驚かれた。

そう、ここからだっただんだ。

それから彼らはいつも二人で行動、もとい悪戯を始めた。2年の初めての魔法実技で、二人合わせて62本の《魔法の射手》を出して、学校の一部を破壊したり、先生が体育で跳び箱で模範を見せたときにマキナが作ったという小型魔法地雷（逮捕もの）をマットにナギが置いて踏ませ全治1週間の怪我を負わせたり、村のど真ん中で《雷の暴風》をぶつけ合わせて道路や建物を破壊したり、『アリジゴクごっこ』とやらをやりたいがためにマキナが大魔法《砂の大渦》を発動し家を数軒飲み込みかけたりと、もはや悪戯というよりはテロを数え切れないほどやった。マキナの両親はマキナを笑わせてくれたナギ君を信じる、と言って全く介入してこない。

マキナを笑わせたことに感謝しているのは本心らしいが、あれは絶対面倒事をこっちに全部押し付けやがりなさっている。

「はあ」

またため息をつく。

「二人とも本当は素直で優秀な生徒なのに。」

これにはほとんどの教師は賛成すると思う。

二人は良くも悪くも正直で、悪事をはたらいたときは嘘をつかないし、クラスメートや教師をよく褒めてくれる。まあ私がよく言われているのは

「あははっ、先生って結構丈夫だなー」Byナギ  
なのだが。

それに二人とも魔法使いの素質は最高と言ってもいい。

マキナはいわゆる天才であり、ラテン語や古代ギリシア語もいまま  
で習ったことは完璧に習得している。実技も優秀で、この前の模擬  
戦では先生が5秒で気絶させられて

orzをしていた。

ナギも学業はまあ残念だが、これまた魔法実技では先生を圧倒していた。ていうかナギの成績が悪いのは教壇や先生の椅子にまで地雷を仕掛けるからだと思う。

おかげでマキナに比べて教師陣には非常に受けが悪い。

そこまで考えると、いつのまにか音が止んでいたことに気づいた。  
おそらくスタンさんが止めてくれたか、ただ飽きただけか。前者で  
あることをせつに願う。

そんなことを考えながら、私は帰り支度を始めたのだった。

「ねー、スタンさん。あのさーもうすぐド　えもんがはじ」ダメじや」ううー、あーん助けてードラえもんーん!!」

「ていうかこれ絶対虐待だろーこの鬼ー悪魔ー、変態ー犯罪者ー」!

ただ今ナギとマキナは罰を受けている。しかしそれは何か誤解を生みそうな光景であった。

二人して簀巻きに逆さ吊りになっているのだ。

さながらそれは日本が生んだ架空の天才柔道家姿三　郎のワンシーンのようである。

「」

その執行人は全くの知らん顔で鼻歌を歌っていた。

「てめえ、絶対楽しんでるだろー! 村の皆さーん、ここに犯罪者がいまーす!!」

よりもよってここは村のど真ん中の公園の木の下である。確かに犯罪現場と言っても差し支えない。

しかし、この事態を察知した村民たちはもうとっくにいなくなっていた。

外から「またあの子たちか」「よくやるね」「ママー、あの子たちなにs「しっ、見ちゃいけません」  
などと聞こえてくる

「ナギ、私たちはこの状態になることもう10回だよ。もうベテランだねー」

「いや馬鹿だろお前」

「ナギだけには言われたくない」よ「わい」

「うがー！このー！」

怒ったら、ただちに行動  
それがナギ、逆さ吊りの状態で勢いをつけてマキナに頭突きをかました。  
ゴッ

「いつてー！やったなこのやろー！」

マキナも負けじと正確にナギに頭突きをかます。  
頭突きの応酬が続く。

ゴッ　ゴッ　ゴッ　ゴッ　　ゴッ　ゴッ　ゴッ　ゴッ　ゴッ

はっきりに言って音だけ聞くとかなり痛々しい。

しかし当の本人たちは

「キャッ、キャッ」

「あっはっはっは」

痛みなどないかのように頭突き合いを楽しんでいる。

しかしやっぱり痛々しい。

スタンさんは見ていたたまれなくなってきたので、とりあえず二人を下ろしにかかった。

~~~~~

「あー、やっと下ろさせたぜ、俺たちの作戦勝ちだぜ」

「うそだっ!!」

「ううードラ もんがー今回はノビタが雷に打たれるオチだったのに」

「うおいつ!!」

当然、反省の色はない。  
さらに、

「「ふっふっふ、俺「私」たちを下ろしたのが運の尽きだ」」

「なんじゃと!?!」

「くらえ！」

「ドラ もんの仇！」

「ナギマキダブルキック！」

「あぶろぼあ！」

そしてさりげなく杖回収する二人。

「バハハ〜イ、スタンさ〜ん」

夕日を浴びて帰りの道をゆく二人。

後に残されたのは、二人のキックで腰をやられたスタンさんのみであつた。

「覚えてろ〜！お前ら〜！」

「やられ役のセリフおつー」

「お、ぼ、え、て、ろ   ガクッ」

これもまた、日常なのであつた

## Prologue SECOND 憂いの教師と雷おじさん（後書き）

魔法・技・魔法具説明

### 《砂の大渦》

任意の場所を砂に変え、さらに渦のように砂を回転させ、相手を地中に引きずり込む魔法。

あまり使う人はいないので比較はできないがマキナが発動させたものは直径50mほどの大きさだった。滞空するすべをもたないものなら、ほぼ脱出は不可能。れっきとした広域殲滅魔法。ちなみに上位古代語魔法。

### 《魔法地雷》

ネギま！24巻に登場した対軍用魔法地雷の超小型版。マキナはナギが使ったものよりもさらに弱めたものを悪戯用として販売自由になるレベルまでにして特許をとった。そこそこ売れて、マキナはホクホクだが、MM元老院に目をつけられたことに気づいていない。

### 《ナギマキダブルキック》

こめられた魔力は関係ない。ただそこに怨み じゃなくてハートがあれば立派な必殺技。

## UNDER STORY 1 赤毛の問題児のとある決心（前書き）

短いです。ちょっとした幕間なので。しかし、  
二人の運命が動き始めるのは確か。



## UNDER STORY 1 赤毛の問題児のとある決心

ナギSIDE

俺はナギ・スプリングフィールド、最強の魔法使いになる男だ。

こう言ったら、大概の奴は笑った。

でもそういう奴も、俺の魔力をちよつと解放してやれば、すぐに黙った。

だが、一人だけ、違う反応をしたやつがいた。

間違いなく、俺の一番の親友で、そして、最強のライバルであるマキナ。

あいつは俺の言葉を聞いたとき、笑ったといえば笑った。

しかし、鼻でだ。

あいつは目で語っていた。

お前じゃ無理だ、と。

すげえ嫌なやつだと思った。

でも、違ってたんだ。

あいつは頭がいいことを自慢しなかったし、できない俺を馬鹿にしなかった。それどころか、勉強でわかんねえところや、どこから知ったのか、先生も使えないような大魔法を俺に教えてくれた。

いいやつだった。

いつしか俺たちはいつも一緒にいるようになり、  
悪戯をしたときはセツトで叱られて、なんか嬉しかった。

この前裸のあいつに抱きついちゃったとき、すげえいい匂いがして、  
つい抱きしめちゃった。

でも次の日になったらいつもどおりで、なんかくやしかった。

今は、屋上に一人でいる。

今日、この前の悪戯のことで、先生にこんなことを言われた。

「またマキナくんを巻き込みおつて！彼女は『偉大なる魔法使い』  
になる可能性が高いのだぞ！いつもいつも無理矢理つれまわして  
彼女の将来がめちゃくちゃになったらどうする！」

あのやろうは人を点数だけでしか人を見ようとしなない嫌なやつだ。  
それに無理矢理つれまわしてなんかない。

でも、あいつ、マキナの人生がめちゃくちゃになるのはいやだ。

あんなに頭がいいのに。俺と違って魔法をたくさん知っているのに。

そういえば、俺はいつもマキナの魔法の話を聞いて、それを確かめ  
ようとしたから、いつも騒ぎを 起こしてた。

あいつからやろうとしたことなんて、一度もなかった。

思い始めるととまらない。

俺はこのままだと、本当にマキナの人生をめちゃくちゃにしてしま  
うかもしれない。

――もう、どこか、

マキナのいないところへいこうか。――  
このままじゃ迷惑だ。

それに、もう学校はうんざりだった。

魔法が好きで、マキナがいたから来ていたようなものだし、未練は  
ない。

そうだ、旅に出よう。

でも、最後にもう一度、

本気でマキナと戦いたい。

UNDER STORY 1 赤毛の問題児のとある決心（後書き）

ケータイ投稿って時間が かかります。

さあさあ、次は真剣なバトル回です。

そして

はたして、 となるのか。

## **P r o l o g u e E N D    一緒にいいな（前書き）**

相変わらずの半端者の作品ですが楽しんでくださいませ。プロローグ、終了でございます。

## PrologueEND 一緒にいいな

その日、マキナは不機嫌だった。

そう、名付けて『スタン（さんの腰に）グレネード事件』から12日。

別にテストの点がわるかったわけではない。

ていうかそんなものいつも100点だ。

悪戯がうまくいかなかったわけではない。

先生に怒られたのでもない。

ていうかそんなの痛くもかゆくもない。

そう、もう12日たつのだ。

次の悪戯が全く始まらない。

ナギが前の悪戯から一週間以上たっているというのに、なにも起こさない。

退屈でしゅうがなかった。

もっとも、教師たちはこのしばしの安穩に浸ることなく、常に気を張っている。

少し憐れである。

そして、もっとも気にいらなかったのは、ナギが学校に来ていない

ことだった。

もう4時間目だ。

もうすぐお昼になってしまう。

ナギはいつも遅刻はするが、お昼までにはちゃんと来た。

そう、お昼ご飯と一緒に食べながら、次の悪戯の構想を練る。

それが二人の日課だというのに。

「ちゃん、マキナちゃん！」

「ほみやあ！？え、な何！？」

「（か、可愛い、じゃなくて！）もう授業終わったよ。マキナちゃん。」

「え、あれ、本当だ！ありがとう！えーと、け、ケンくん？」

「（ぎ、疑問形？）あってるよ」

「それじゃーね！」

「（展開早っ！違う！今日はチャンスかもなんだ！）あの、マキナちゃん！」

「んー？」

「き、今日一緒にお昼食べない！？」

マキナは考える。

いつもならナギとの悪戯会議なのだが、今日はいない。

でも毎日話していたせいか、なんか一人でいる気分にはならない。

ここはいつもナギにやっているようにお昼を食べながら魔法講義としゃれこもうか。

「うん、いいよ」

「（や、やったー！）じゃ、いこうかー！」

「（やけにテンション高いな、ケン・アンテくん？）」

相手の拳動を考えるとどうやっても鈍いとは思えないようなこと



を考えながら、マキナは食堂へ向かったのだった。

ちなみに、マキナをお昼に誘った男の子の名前は ケント・アンダーソンである。

彼の苦悩は推して知るべし。

さらにいうとこの後予定通りお昼ご飯がてらマキナの魔法講義が行われたわけだが、彼にはあまり理解できず、ほぼあいづちをうつことしかできなかったうえ、食堂にいたクラスメートや下級生が聞いて集まってしまい、完全に二人きりではなくなってしまった。

また、その場にいた子の

「先生よりわかりやすい」

という発言で、教師が

orzをした。 合掌。

だが、その様子を、窓から覗いていた赤毛がいたことは、誰も気づかなかった。

そして 結局、ナギは来なかった。

~~~~~

マキナは自分の部屋でその夜、考えていた。  
なぜナギが来なかったのか。

ナギの家に行ったら、今朝はいつも通り学校へ行った、と言われた。

敢えてナギが学校に来なかったことは言わなかった。

なぜ、なぜ、

私にも秘密でなにを、

コッ、

窓から音がした。

コッ、

また。

窓の外を見下ろす。

ナギだ。

クイツ

指でこっちへ、と。

くくくくくくくくくく

マキナはナギに言われるままについていった。杖を持って。

着いたのは、いつも一緒に戦っていた場所。

村の片隅の、なかなか邪魔がはいらない、

「どうしたの？ねえ、なんで今日来なかったの？」

「マキナ」

いつものナギと全く違った、真剣な顔。

「な、何？」

鼓動が速くなる。

「俺と」

「う、うん」

唾を飲み込む。

「本気で戦ってくれ」

「はい？」

「この時間のこの場所なら邪魔はいらない」

「いや、そーじゃなくて」

「頼む」

「意味も何もわからないけど、いいよ。『ちょっと死ぬかもモード』でいく」

「ああ」

互いに杖を構える。

瞬間、

「『《戦いの歌》」」

先にしかけたのはマキナだった。

技も何もないが、明らかに人の限界を超えた速さを伴った拳がナギの顔へ向かう。

しかし、ナギは平然と腕で受けた。

「やっぱり普通に防いだね！さすが！」

「当たり前だ。初めて戦ったとき、それをいきなりやられて負けたからな！《白き雷》！」

「（無詠唱！？）うわっ！」

バリッ！！

すぐにナギからの反撃がきた。ナギの手に閃光がほとばしり、雷撃は虚空に消えた。

「（今のは障壁なしでくらったら、ちょっと無事で済まないね）じやあ、さらに速くいくよ！《戦いの旋律 加速3倍拳》！」

先程の《戦いの歌》のときよりも遥かに速い速度でナギに突っ込む。

しかし、

「『解放』」

光の奔流がマキナを襲った。

ズドドドドドドドド！

辺りの地形が変わっていく。

「げほっ、がはっ、（数発もらっちゃった！今のは遅延呪文の《魔法の射手》？でも軽く50本超してたよ！？） あははははは

！ナギ、すごい！さすがに今のは予想外だよ」マキナ、本気で戦ってくれ。これが最後なんだから！」 何が？もしかしてこれでお別れとか？だとしたら笑えないよ？ていうかいきなりにも程があるよ？」

「  
」

「なんで？」

声が震える。

「 勝ったら教えてやるよ」

「 忘れないでよ！フォルテース・フォルトーナ・ユウアエト、  
集え、深きより来たりて十重二十重と回り、彼の者を飲み込め《磊磊の車輪》！」  
磊磊の車輪《！》」

ゴゴゴゴッ！

数百もの石の塊が車輪のように回転してナギへ向かう。

「マンマンテロテロ『光の精霊119柱、集い来たりて敵を撃て《魔法の射手 光の119矢》』！」

物量対物量。

ナギの光の弾幕が石の塊にぶつかり、削られた石のかけらがマキナ

の視界を遮る。

「くっ、《氷爆》！」

ドッ

爆風が石のつぶてを吹き飛ばし、視界が晴れるが、

「（いない！？ いや、上か！）」

ナギはよく模擬戦で上からの奇襲をよくやった。

「マンマンテロテロ」影の地統ぶる者、スカサハの、我が手に授けん、三十の棘もつ霊しき槍を《雷の投擲》」

ゴッ！！

「（今度は破壊力が大きい《雷の投擲》！視界を遮って避けにくくした上での攻撃！ならこっちも！）フォルテース・フォルトーナ・ユウアエト」来たれ氷の女「《戦いの旋律 加速・強化2倍拳》」ガッ！？」

「油断したな！この勝負、俺はぜってえに負けられねんだ！このままいかしてもらうぜ！」

ゴッ ガガッ ドスッ

顔に、腹にナギの拳がささっていく。

「（強い。いままでのナギよりもずっと。それに、今は私だけを見ている。でも、嬉しくない。だって、だってさ、）」

「これで、終わりだ！《戦いの歌 最大出力》！」

「拳に悲しみしか伝わって来ないんだもん！」

ドカツ！！

《戦いの歌》でもなんでもない、ただ魔力を箆めただけのパンチが

完璧なカウンターのタイミングでナギの顔にはいった。  
ナギは昏倒した。

~~~~~

「《治癒》」



ナギの傷もすべて治した。あとは起こすだけ。

ガバッ

と思ったら起きた。

少しの間茫然としていたが、ナギの目に涙が溢れてきた。

「そうか、俺、負けぢまっただんだな」

「なんでさ、なんで最後だなんていったの！？なんであんな危ない戦い方してでも勝とうとしたの！？」

「決着、ズズッ、づげだがつだ　一人で最強の魔法使いになるためにさ　俺、今日、この村をでていこうと決めたんだ。」

「なんで」

「俺さ、バカだろ？いくら悪戯してもさ、別にいいと思うんだよ。バカが不良になるだけだから。でもさ　マキナは違うじゃんか。頭いいし、悪戯やってるけど授業は真面目にやってるしさ　お前は絶対『偉大なる魔法使い』よりもすげえやつになると思うんだ。でも、俺のやってることに巻き込んでたら、そうならなくなっちゃうと思うてさ」

「はあ、うん、いつものナギよりもバカだね」

「なに！？俺は真剣に考えて」

「私さ、最初はさ、魔法なんてのは捨てて使えない人っちみに生きてうって思ってたんだ」

「えっ」

「だってさ、外では魔法って秘密なんでしょ？こんなもの知ってたから一生自由じゃられない そう思ってたんだ。なんだか、生きる道がとつくに決められている感じがして」

「」

「だから、初めてナギの言葉を聞いたとき、本当に愚かだって思った。余計に自分を縛ろうとしているように見えた」

「違う！」

「そう、違っていたんだ。ナギはいつも魔法で悪戯ばかりだったけど、人助けだっていっぱいやってた。だからわたしわかったんだ。魔法を使うのは決められたことだけど、どう使うかは人次第。大切なのは皆自分で決めることじゃなくて、与えられたものも、自分で決めたことと一緒に抱えて自分の進みたいところを目指すことだって！」

「！」

「ナギの夢は、わたしの夢にもなった。ナギが今の私をつくってくれた。わたしのこれから、ナギがいたからできたんだ。だから、

「一緒にいいな」

「俺はこの村をでる。もう決めた」

「ナギ　そう、それがナギの進みたいところなら」

「だから一緒にきてくんね？」

「ふえ？」

「俺もマキナと一緒にいい」

「うん！喜んで！」

「おしつ、これからもよろしく、相棒！」

二人は握手を交わした。

ガサッ

「「うひいっ!?!」」  
茂みが動いた。

そして、現れたのは！

「ふに、話はすべて聞かしてもらったよ。お兄ちゃん、お姉ちゃん」

オコジヨであつた。

「えーと、しゃべったつてことはオコジヨ妖精？」

「そ、さすらいのオコジヨ、シルフィ・レルフィとはわたちのことな」

「舌回つてないし」

「らぶらぶですね。お二人しゃん」

むんず

マキナがシルフィを掴む。

「そおi「待つちえ」」

「（ら、らぶらぶ）ちょっとマキナ、まずそいつの話しきりつぜ」

「で、何の用？」

「わたちも連れてつて」

「魔法は？親御さんは？」

「私たちは天才だからすごい使いりゅー、パパとママとは先週別れた」

「よし、採用」

「いや、いいの？ナギ」

「それがこいつの」

「進みたいところ ってことね。じゃあ、わたし支度してくるね！」

~~~~~

「お待たせ！」

「おう！いくぜ！」

「 ってどうやって？」

「無論杖で！」

「あのーわたし乗れる杖じゃないんだけど」

今さらだが、マキナの杖は初心者用のやつである。

「何言ってるんだ。後ろ乗れよ」

「あ、うん。ぎゅ」

「（あ マキナの心臓の音が） よし、シルフィも」

「りょくかい」

「おっしゃあ、れつつらー！」

ゴオッ！！！

こうして、二人と一匹の旅、もとい伝説が始まったのであった。

「ところで、こりえって駆け落ちでしゅか？」

むんず

「そおい」「ここからだとシャレにならないでしゅー！」

とにかく、彼らの旅路に幸多からんことを。

## PrologueEND 一緒にいいな（後書き）

### 《磊磊の車輪》

呪文の通り、多数の石を一塊にして車輪のように回して相手を攻撃する魔法。実は制御がけっこう難しく、サイズを大きくしにくい。

## Load・i メタモルフォーゼ (前書き)

タイトルのとおり、変装回です。容貌描写って難しい。では、どうぞ  
お楽しみください。



## Load・1 メタモルフォーゼ

旅立ちの翌日。

ただ今ナギ一行はロンドンの空を飛行中である。下の都市には人がたくさんいるが、シルフィが認識障害の魔法をかけている。

ちなみにこの認識障害の魔法は、魔法の存在の秘匿が一般の世界に住むときの最優先事項であるので、魔法学校では入学してすぐに教わる魔法の一つであり、初歩の初歩でもあるので、オコジョ妖精でも扱える者は多い。

しかし、あくまで一般人に対して使うものなので、

「あーっ！ちくしょう！魔法使いに見つかっちまった〜！」

「ナギのバカ〜！だからちょっと危なくても低空飛行でいってと〜！っ！つか歩いててもよかったじゃん！」

ということになる。

ロンドン。

「霧の都」とも言われ、

かつては国際金融市場の中心地であった、イギリスの首都。人口は700万人を超す。

全国各地からの鉄道、交通機関が集まっているので、多くの人を訪れ、住み着く。魔法使いとて例外ではない。木を隠すなら森の中、ともいうし。

魔法学校の卒業生の修行先にもよくなる。

したがって、それだけ魔法を知る者も多い。管理もしっかりしている。

だから、見馴れないやつがくればあつさりばれる。

「どうするの！？次見つかったらウェールズへ強制送還かも！？」

「いや俺こんなにかくさんの人見るのは初めてですよ」

「あほ〜！」

「こによままじゃお二人の愛の逃避行が〜！」

ガシッ

「そおい」だからしよれやめちえ〜！」

愛のなんとかはどうでもよろしかろう。

確かに、魔法使いに見つかったのはナギがまるつきりお上りさん状態で、高く飛んでキヨロキヨロして、時計塔をもっと近くで見ようとしてそこを管理していた魔法使いに鉢合わせしてしまったからなのである。

後ろにつかまっているだけのマキナにはどうにもならない。

「とにかく、これからはこのままの姿じゃ駄目だと思うの。そこで

」

「ん？」

マキナが魔法袍に手をつ込む。

ガサゴソ

「年齢詐称薬」

ぴかー

「これを食べると幻術の作用で身体を大きくしたり、小さくしたりできるんだー。一粒18ドルでいいよー。ナギ太くん」

「誰がナギ太かつ！つーか金とんのかよ！？」

「シルフィにはこの種族詐称薬だよーこれを食べると人間に変わるよー」

「スルーかいつ！」

「あれ、シルフィ、どうしたの？」

「　　わたちはこのままでいいでしゅ。ていうか今食べたら全裸の人間が出現するでしゅ」

「つーかなんでんな便利なもん使わなかったんだよ？」

「いや、ナギはオコジョ以下なの？今シルフィが言ったじゃない」

「？」

「服がない」でしゅ

「あっ！」

「そうだよ、今ナギがこれを食べたなら、少年用の服を着た青年が出現する。しかも運が悪ければ服が破けてナギのおちがでて魔法使いの前に警察につかまっちゃうよ」

「うおいつ！？女の子がんな発言すんなー！？」

「というわけでまず服を買おうよ。お金あるよね？」

「ねえ」

「は？」

「俺は金持ってねえ〜！文無しだ〜！」

「ええええええ〜！？」

「衝撃の甲斐性なし発言でしゅ〜！」

「うるせww！」

「ていうか最初一人でどうやって旅する気だったのwwそれww！」

「なんとかかなると思ってたww！」

「バカwすごいバカがここにいたww！！」

~~~~~

「はあ、しょうがないね。ナギの服代もわたしがだよ」

「すまん」

「じゃ、一旦杖から下りて服屋探そ」

「ところで、マキナって金どのくらいある？」

「だいたい3万ドルくらいかな」

しゅん

「ええ〜！？9歳児が持つ額じゃねえ〜！」

「おお、ナギがもつともな発言！ていうかさつきから驚いてばっかだね、私たち」

（あとがきに以前書きましたが、マキナは悪戯用にレベルダウンさせた魔法地雷の特許をとってかなり金を儲けました。）

~~~~~

そして、そこそこ大きな店を見つけた。しかし、またもナギがやかしかけたのである。

「（あれ、この店のドア、取っ手がねえぞ？もしかして、ここに魔法使いの拠点があつて魔法使いにしか開けねえんじゃない）」

と、自動ドアの存在を知らなかったナギの邪推である。

緊張の面持ちで一步踏み出す。

ういゝん

ドアが開いた。

「（ 罨、か。マキナを騙してもこの俺の目はごまかされねえぞ。）」

「これは罨だ」

「はい？」

「だが、向こうが入れてくれるっつーならこっちからいつてやるぜ  
ー！ー！うおゝゝゝゝ！」

ドドドドドドドドドド

ガシッ

「ぐえっ！？」

マキナはナギの首ねっこを思い切り掴んだ。

「いや何やってんの？」

その後、マキナはこの世界には自分たちの魔法と同じように「科学」なるものがあると教え、あのドアが動くのにもそれを使っている、と教えた。

「つかこのくらい教えとけよ、ナギの親御さん。」

「というわけで、着いたよ。ここが試着室！」

マキナはテンション高めである。初めて自分で服を買えるからか。

「じゃあ、この中で年齢詐称薬食べて試着すんだな」

「そういうこと。お披露目は後で！覗かないでね！」

「バゝ力。誰がお前の貧相な『《加速3倍拳 乙女パンチ》』「ぎやぼっ!？」」

「もう、ばかゝ！絶対ぎやふんと言わせてやるんだから！」

ジャッ

試着室のカーテンが閉められ、後に残っていたのは乙女の怒りをその顔いっぱいを受け昏倒する少年のみであった。

チーン

ていつか9歳児にグラマーさを求めるのは酷ではないか。ナギよ。

~~~~~

「いって、あんなこと言っただけで魔力パンチってなんだよ、ちくしょー」

ナギははまだ痛む頬をさすりながらつぶやいた。

ナギはとづくに自分の服を決め、それを着て店の外で待っている。

いまだにマキナは服を選んでいるようだ。

ナギ9歳。女子の買い物物の長さを初めて知った。

そんな彼は、もう一つ面倒さを感じる事態に直面していた。

やたらと声をかけられるのだ。主に女性に。

今のナギは年齢詐称薬によって15歳ほどに変化しているのだが、それにしては背が高い。177cmほどであろうか。スマートだが体つきはがっちりとしている。幼さが若干残っているが顔立ちは整って、目元はつり目がちだが凛々しい。

ようするに今のナギはかなりハイスペックなイケメンである。

「あの、すいません。お一人でしょうか？」

また一人。

「いや、人待ってるんだけど」



今までの女性はここであつかりしたような顔で退いていったのだが、

「あ、じゃあ今までどのくらい待ってます？」

「え、に、20分くらいかな？」

「じゃあ多分まだ来ませんよ。その間ちよつとお話しませんか？」

「いや、いいよ。そつちの都合もあるだろうし」

「いいえ、構います」おつ待たせ！ナギ待ったでしょ？ごめんね  
「！」

ようやく買い物が終わったようである。ナギの背後からマキナの声  
が聞こえた。

「あれ？」

突然無言になつた女性に戸惑うナギ。

「し、失礼しました」

そして足早に立ち去る女性。

「まったく、なんだったんだあいつ？つーか遅かったじゃねえかマキ  
」

振り向いて、一瞬呼吸が止まった。  
えらい美人がそこにいた。いや、マキナに違いなかったのだが。

肘の辺りにまで伸びた青い髪にはつちりと大きな目。引き締まった唇に真珠のように白い肌。

しかし、一番ナギを黙らせたパーツは

ゆさり

と擬音が聞こえてきそうな大質量の胸であった。

15歳の質量じゃない。

しかも、マキナのコーディネートは紺色のボディースーツに七分丈のベスト、そして左足側の太ももから下を切ったジーンズという、けっこう刺激的な服装だ。

「どーだ、ほらナギ、誰が貧相だつて？」

「」

「あれ？おーい、ナギ」

ずっとマキナの胸部に釘付けである。

「ナギさんはマキナちゃんのおっぱいに夢中でしゅ。よかったでしゅね。」

「っば、ばかつ！確かにちよつと見せびらかしたかったけどそこまで見るとは言つてない！《加速3倍拳 乙女パンチ》！」

「べげろあつ！？」

ようやくひいた頬の痛みをまた再発させたナギであった。

~~~~~

「ちくしょー」

ナギはいまだに悪態をついている。

「ていうかさーナギはなんでアロハシャツなの？」

ナギは店のどこから見つけたのか、ズボンはいつも着ていた黒一色のやつの大きいサイズのものであるが、上は紅葉柄のアロハシャツである。

「いや、なんかびびつときてな！いーだろこれ」

確かにそれは色彩のバランスがよかったし、赤を基調とした柄は赤毛のナギにあっている。しかし下と合わないし、目立つ。

「なんかこーいうのって『日本的』なんだと」

アロハシャツは日本的な柄がけっこう多い。

でもそれはそれとして

あわな

「それにしてもまあかつこよくなっちゃったねーナギは。ほら、服は変だけど皆ナギを見てるよ」

「なんかひっかかるけど、サンキューな。マキナの金で買ったん

だし」

「いーよ。将来三倍返しにしてもらってから」

「うおい！」

「うわーマキナちゃん高利貸し」

そういうマキナもかなり視線を集めている。男女問わず、顔、そして胸に。

「なんか変身前より目立っているね。杖使つのはもうちょっと人が来なさそうなところにしよ」

~~~~~

「というわけで、ここを出発だよっ！」

普通の路地裏である。

よくわからない方は『魔女の宅急便』にでてきた町並みの細い路地を想像していただきたい。

「よし、シルフィ！認識阻害魔法オツケーか？」

「オツケーでしゅ」

「じゃあ出ばも」ナギ、これからの予定なんだけど、決めてないよ

ね？」

「ああ」

「さっきのアロハシャツの柄で思いついたんだけど、行き先は日本にしない？」

「なんで？」

首を傾げる。

「日本はね、アジアでも屈指の魔法使いの中心地なんだって。でも、もとからある呪術とかなんとかがあって国内で勢力が伸ばせないんだって」

「つまり、魔法とは違う戦い方でつえーやつがいるってことが、ワクワクするぜ！」

「魔力を使わない一般人用の戦い方もすごくって、ときどき魔法使いに勝っちゃう人がいるっていうし、すごい興味があったんだ。いいよね？日本で」

「おう！おっしゃー待ってる日本！乗りな、マキナ、シルフィ！」

「うん、って大きくなったからちよつと狭いね　ぎゅ」

むによん

ナギの背中に、極上のマシユマロのような感触が伝わった。無論、マキナの胸部。

むにむに

「（年齢詐称薬、サイコオオオー！！）うおおおいくぜえええええええ！」

ドヒュンー！

「えっ、ちよっ待つ　速過ぎいいいい！」

「ふにににににー！ナギしゃんもつとゆっくりーー！」

さらに強くしがみつくマキナ。  
むによむによ

「うおおおおー！！燃え上がるぜえええええ！」

ナギ9歳。新しい『魔法』を知ったのだった。

そして、慕進するナギ一行が目指すは日本　ではなく、ちよつとずれて　ギリシャ。ていうか地図持ってるのだろうか。こいつら。

果たして、そこに何が待ち受けているのだろうか。

「いーかげんにしなさい！」

ポカッ

「へみゅっ！？」



## Load・i メタモルフォーゼ（後書き）

### 技説明

#### 《乙女パンチ》

ネギま！単行本8巻にでてきた悪魔ヘルマンが《悪魔パンチ》なるものを繰り出していたが、それとは関係ない。単に《戦いの旋律》に乙女の怒りをのせただけの一撃。ギャグ補正がかかるので、ナギはある程度平気だが、一般人がくらったら、多分即死。アーニヤの《フレイムナックル》的存在。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3409y/>

---

英雄を導く無限の空

2011年11月20日14時01分発行